

目的：Carcino Embryonic Antigen は1965年に Gold らによって直腸癌組織中に発見された癌特異抗原である。その後、各種癌患者の血清中に発見され、特に大腸癌、胆道癌、肝癌、肺癌の血清学的診断に応用されている。一方同じ消化器系であっても口腔癌における CEA 報告は散見されるにすぎず、その診断価値があまり認められていない。そこで今回我々は、口腔癌組織中にどの程度 CEA が存在するかについて検討を加えた。さらに CEA の様な癌特異的な蛋白を常に産生する培養癌細胞は、癌研究に有力な武器となることから、当科において分離株化された口腔扁平上皮癌培養細胞 K-44 についても検討した。

対象：当科を受診した口腔悪性腫瘍患者より得られた病理組織標本12検体を用いた。培養細胞は、当科で分離培養した上顎洞癌由来の K-44 細胞と、K-44 細胞の移植により形成されたヌードマウス腫瘍について検討した。

方法：組織中 CEA の検索は、Avidin-Biotin-Peroxidase-Complex 法を用いた。この ABC 法は、安定性に富み、高能率のポリマー構造を有して、非特異的反応が非常に低いという特長を備えている。

結果：扁平上皮癌症例 8 例はすべて陽性を示し、単純癌、腺癌、粘表皮癌の各々 1 例は、(-)であった。培養細胞については、島状に増殖した培養癌細胞の最表層に特異的に認められた。この細胞を得た原発腫瘍についても CEA は陽性を示した。またこの細胞によって腫瘍を形成したヌードマウス組織中 CEA も陽性であった。

考察：今回我々は、直腸癌の血清学的診断に用いられている CEA を、口腔悪性腫瘍組織中に存在するかどうかを検討するとともに、当科において分離株化された、口腔扁平上皮癌由来の株化細胞 K-44 についても検討を加えた。その結果 CEA は、検索された口腔扁平上皮癌全例に存在し、特にその在部位は、未分化型では増殖が旺盛な癌胞巣の中心壊死部に、高分化型では角化細胞の周囲に認めた。これは川崎らの報告と一致し、いずれも細胞死が起ころうとしている部位であり、CEA 蛋白と、細胞死の関連を示す結果と思われた。一方数例についての血清中 CEA は、全例正常値以下であった。このことは、口腔癌における血清中 CEA の診断価値が低いことを示しているものと思われる。当科で分離株化した K-44 細胞はその細胞中、培養液中にも CEA を認めており、今後の CEA と扁平上皮癌の関連について研究の際非常に有用な材料となることが考えられた。

第23回 松本歯科大学学会（例会）開催の案内

◎第23回松本歯科大学学会（例会）は、昭和61年11月15日(土)午後1時より本学に於て開催致しますので、何卒ご出席賜りますようご案内申し上げます。

松本歯科大学学会 会長 加藤倉三

◎演題募集

講演に出題希望の方は、400字以内（B 5 原稿用紙使用）の要旨を10月25日(土)正午までに集会幹事までお届け下さい。なお講演終了後、目的・方法・成績・考察の順に書かれた1,200字以内（A 4 原稿用紙）の抄録を提出していただきます。

松本歯科大学学会 集会幹事（歯科薬理学教室 前橋 浩）